

五木村の狩猟民の話

賀川 光夫[※]

一九九四年三月一六日、熊本県球磨郡五木村野之脇で発掘が行われている縄文時代遺跡の調査にでかけた。

前年人吉市郊外の高速道路予定地の遺跡調査のあと、無理をして五木村を縦断し五家荘をへて阿蘇大津までのコースを走ってもらった。古くから伝えられてきた狩の様子や焼畑に関する情報を期待したからである。

五木村野之脇遺跡はダムの湖底になるはずの山裾に広がる縄文早期の集落跡であった。遺跡の調査は五木村教育委員会学芸員の福原博信さんで、作業小屋の壁板に竹串にされ、乾燥したタヌキの胆嚢が眼についた。聞くとタヌキの胆嚢は胃薬として使用するという。小屋の窓にはタヌキ八匹、イノシシ三匹の頭が吊るしてあり、作業場にはシカとイノシシの下顎骨が発掘の参考資料としておいてあった。

福原さんの発掘はきわめて興味のある調査方法で進められていた。出土する石器については、形や刃こぼれによって用途を割り出し、近くのムラの狩の道具と比較し、石器から過去の情報を集めようとしていた。ムラの狩猟民の調査をもとに縄文時代の狩猟民を想定する調査法なのである。そして調査には、猟師、採集民として長く経験のある人達がメンバーとして参加していた。

福原さんの調査法は、一九六〇年代から七〇年代にかけてアメリカのプロセス学者とよばれる研究者たちによって啓発された民族考古学(エスノ・アーケオロジー)とよばれるものであった。九州の背梁山脈の中に長く閉じこめられていた狩や採集生活をとおして縄文時代の狩猟民の姿をとらえようとする調査法は確かに効果的であった。

発掘に参加している尾形孝行さん(六〇才)は猟師歴二〇年で五木の木々をくまなく知り尽くし、シカ・イノシシなどの生態に詳しく、ウジ(狩りをする場所)道などを知り尽くしている狩のベテランであった。尾形さんから罾を仕掛ける場所、仕掛け方、狩の方法などを詳しく教えて貰うことができた。

狩は五人一組のチームで編成し、一番効果のあるウジ道(動物の通り道、ウジ場は足跡のケズメでシカ・イノシシなどを判定する)をえらんで抜け場をふさぐようにイメダチ四人(ウジ場を固めるための猟師)を配置しておく。中入り一人は犬数匹と共にウジ場にはいり獲物を追う仕組みで狩が行われる。シカは追い込まれると全身が燃えて体温が上がり(シカがヤケル、という)ウジを抜け出し川にとびこむ。イメダチ達はそれを狙い撃ちをする。このようにして狩がおこなわれるのであるが、五人の猟師の分配がまた面白い。最後に射止めた猟師に首上(頭)をあたえ

※別府大学名誉教授

肉と骨は平等に分配し、内蔵は夜の会食で全員で食べることになっている。内蔵が一番うまいといわれ、九州山脈他の地方の狩場での分配も同じように内蔵は全体の食事に用意されている。

私は尾形さんの話を聞いているうちに狩りの様子や獲物の分配について、頭に浮かぶものがあった。昔の狩りもこのようなチームでおこなわれ、持っている鉄砲を弓矢にかえればそのまま昔の狩りの姿にならないだろうか、分配の様子も、内蔵を食べる風景も過去の様子を写しだしているようで興味深く思えた。

森下福嘉さんは山の植物をよく知っていた。カワビャクシヨ（ニンジン科・地元ではウマゼリという）は花が白く南向きの水けのある傾斜地に自生して茎と葉は食用になり、根は褐色で自主のニンジンに似て太い。この太い根を乾燥させると煎じ薬となり特にガンの特効薬であるという。このウマゼリの漬物を中村圭子さん（六一才）から御馳走になった。ウマゼリはシロアエにして食べたりゴマシヨウユで食べるとうまくセリよりは食べよといわれ貴重な山菜として知られていた。ウマゼリも昔から食用、薬用として用いられていたことがよく分かり、狩りと同じように採集民の姿を思い起こさせた。

さて、野之脇遺跡の発掘はこのように狩猟、採集体験者の知識を存分に生かして調査が進められていた。良質の黒曜石の剥片石器の使用痕を調べていると、縄文時代の狩人の姿が浮かび、山菜取りの道具が閃く。この調査方法が、アメリカで起こったプロセス学派の「民族考古学」であり、効果的方法であると思えた。

五木村教育委員会の資料室に集めてあった石器のうち縄文晩期の土器とともにみつかったという横長の剥片石器をみると焼畑のアワ穂摘みの小さな鎌の刃によく似ていた。遺跡や遺物を民俗、土俗学の視点にあわせてみると過去の人の働きまで見えるようで興味深い。

新刊紹介

韓国仏教文学史研究会編

『仏教民俗学の世界』

本書は、韓国の仏教民俗学はどうあるべきかについて開かれた最初の仏教民俗研究会の発表内容の総括である。近年になってようやく韓国の民俗世界にも仏教との関わりを問う声が高まっていたので、研究会の発足段階から注目的であっただけに、この韓国民俗学最初の仏教民俗研究書が刊行されたことからも大きな反響を呼びおこしたものである。

第一部 仏教民俗学の課題と展望

1. 仏教民俗学の範囲と性格……………洪潤植
2. 韓国民俗と仏教儀礼……………呉出世
3. 民俗劇と仏教……………尹光鳳
4. 韓国仏教民俗論の現代的課題……………片茂永
5. 仏教民俗と歳時風俗……………李昌植

第二部 仏教民俗と民衆芸術

6. 月明師兜率歌の仏教説話的観念……………洪起三
 7. 仏教民謡の機能と意味……………李昌植
 8. 17世紀仏教歌詞の理致表出の様相と意味……………全種導
 9. 野談所載僧の人物機能分化……………金承高
 10. 仏教と俗文学……………尹光鳳
 11. 帝釈信仰の韓日比較民俗論……………片茂永
 12. 僧舞の源流に関する考察……………李愛珠
- 漢訳仏教圏において各々の民族の仏教受容の差異をみる時、朝鮮民族の仏教受容の一端をも示す書である。 (片茂永)

1996年1月刊 9000ウォン（韓国）集文堂